

TZ 〈ほんの窓〉

第 11 号 (2007. 2. 1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏図書助成コーナー「本の紹介」班

働く女性の江戸時代

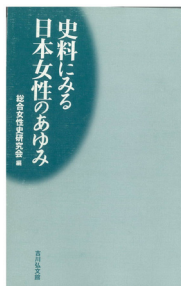
日本の高度経済成長を支えた「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業は、近年、「男は仕事、女は仕事と家庭」という新しい形に変化したといわれています。「働く女性」はある時代を映す鏡のようです。ここでは江戸時代の女性労働に着目しながら、近世女性史研究の本を紹介します。

1980年代の女性史研究

女性史総合研究会編『日本女性史』全5巻(東京大学出版会, 1982. 3【586:111:1-5】)が刊行されたのは1982年のことでした。このシリーズは歴史学のなかで孤立した存在であった女性史研究に新たな展望を開いたものと評価されています。以後、『論集近世女性史』(近世女性史研究会編, 吉川弘文館, 1986. 4)、『日本女性史』(脇田晴子, 林玲子, 永原和子編, 吉川弘文館, 1987. 8【3670:1102】)、『日本女性生活史』(女性史総合研究会編, 東京大学出版会, 1990【3670:276:3】)が相次いで出版されました。これらの論集には女性労働に焦点をあてた論文が必ず取り上げられています。この時期にフェミニズムの分野でも女性労働が関心を持たれていたことと無縁ではないでしょう。



『女性の暮らしと労働』(小和田美智子, 長野ひろ子編, 『日本女性史論集』6, 吉川弘文館, 1998. 3【3670:478:6】)にはこの時期の代表的な論文が収められています。農業労働における女性の地位と役割を論じた長島淳子、都市の女子奉公を採り上げた片倉比佐子、名主の日記から妻や娘の家内での働きを明らかにする河野淳一郎と大口勇次郎の論文が1980年代を代表する成果として収録されました。雇用労働と家内労働の双方に目配りした編集となっています。



史料の発掘 これらの研究は女性の姿を史料の中から発掘してくる作業でした。文字として書かれ、現在まで残存しているのは行政や経済に関わる記録が中心であり、当主である男性の名前が数多く登場します。そこから描かれる歴史は男性中心の歴史であったという反省のもとに、史料の中から女性に関する記述が丹念に拾い出されてきました。『史料にみる日本女性のあゆみ』(総合女性史研究会編, 吉川弘文館, 2000. 12【3670:711】)には、史料原文とその解説が収録されています。

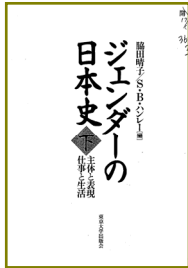
歴史人口学と女性史

歴史人口学の分野では、速水融『江戸の農民生活史: 宗門改帳にみる濃尾の一農村』(日本放送出版協会, 1988. 7【3343:11】【319:211】)、斎藤修『商家の世界・裏店の世界: 江戸と大阪の比較都市史』(リプロポート, 1987. 10【BQc:653】【317:157】)などの一連の研究から、結婚・出産や引越・奉公を契機とした人口移動の状況が次々と明らかにされてきました。これらを受けて、藪田貫『女性史としての近世』(校倉書房, 1996. 6.【3670:1103】)は、女性のライフサイクルという側面から、奉公経験と結婚年齢の関係に階層ごとの違いが見られることに注目しました。近世後期を「娘たちの働く時代」と位置づけ、花嫁修業的な奉公、賃労働的性格の奉公、身売り同然の奉公が、女性たちのその後のライフサイクルの分岐点となると述べています。



女性史からジェンダー史へ 1990年代にはジェンダー概念を歴史学に導入しようという取り組みが西欧ではじまります。女性という領域に留められていた女性史は、性別による差異化の歴史を問うジェンダー史へと転換することになったのです。デュビーとペローの編纂による『女の歴史』全12巻(杉村和子, 志賀亮一監訳 藤原書店, 1994.5-2001.3【3670:347:1-5】)は、女性は公的・政治的な記録には残らない一方で、女性の図像や言説が氾濫していることに着目し、男女関係の歴史を描いたものです。この中でスコットは労働を男女の性別で区分して論じること自体が19世紀に作り出された言説であると位置づけました。『ジェンダーの歴史学』(スコット著; 荻野美穂訳 平凡社, 1992.5【3670:292】【586:338】)でも、女性労働者を都市化や工業化の過程にとって周縁的存在として扱おうとする歴史家を批判しています。

日本では『ジェンダーの日本史』(脇田晴子, S・B・ハンレー編. 東京大学出版会, 1994.11-1995.1【3670:2:上下】【586:389:上下】)が嚆矢となりました。身体と性愛など従来の歴史学にはない主題が正面から取り上げられているとともに、新しい視点で史料が読みなおされています。横田冬彦の論文は<働く女性>への性的なまなざしを俎上にのせました。近世には女性の労働力なしには成り立ち得ないような産業社会・都市社会が成立していたが、彼女達の自己主張を封じこめるために<貞淑>という言説が登場するという「女大学」の再解釈を行なっています。



大口勇次郎も『女性のいる近世』(勁草書房, 1995.10【3670:680】)で女性の登場しない近世史を打開する筋道として、新史料の発掘というアプローチだけではなく、政治・社会の表舞台に登場できない社会的要因を探り出す必要性を説きました。『女の社会史:17-20世紀:「家」とジェンダーを考える』(大口勇次郎編. 山川出版社, 2001.3【3670:728】)でも「全体史の中に女性を描く」という編纂の意図を述べています。

大口勇次郎も『女性のいる近世』(勁草書房, 1995.10【3670:680】)で女性の登場しない近世史を打開する筋道として、新史料の発掘というアプローチだけではなく、政治・社会の表舞台に登場できない社会的要因を探り出す必要性を説きました。『女の社会史:17-20世紀:「家」とジェンダーを考える』(大口勇次郎編. 山川出版社, 2001.3【3670:728】)でも「全体史の中に女性を描く」という編纂の意図を述べています。



ジェンダー史としての女性労働 ジェンダーという視角を女性労働史研究に本格的に導入したのは、長野ひろ子『日本近世ジェンダー論:「家」経営体・身分・国家』(吉川弘文館, 2003.1【3670:853】)です。家長夫婦の統括のもとに傍系家族や下人など大勢の構成員を抱えていた「家」経営体は、江戸時代に小農民経営が成立することによって、「家」経営体内部のジェンダー秩序を大きく変化させることとなります。生産労働・再生産労働に加えて経営的管理労働という区分を設けることによって、女性労働が管理労働の大半から排除されていくことを明らかにしています。この構造を支えるイデオロギー言説まで射程にのびた本書は近年のジェンダー史の最も体系的な成果といえるでしょう。

一方、長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造』(校倉書房, 2006.3【3670:1104】)は、ジェンダー史研究の有効性を認めながらも、「男女関係史」に矮小化される危険性に留意すべきであると警鐘を鳴らしました。1980年代に菅野則子との間で見解の相違をみた農村女性労働の質的变化と女性の地位について再整理をし、労働による経済的保障が女性の自立を促進させる要素となりうるのかという命題に挑戦しています。

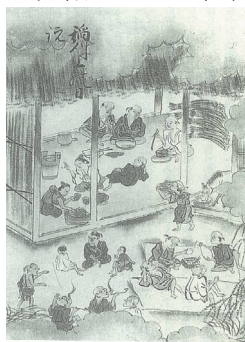


図13 階層上げの取組、働く男たちと立ち働く女たち。
『幕藩制社会のジェンダー構造』より

一方、長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造』(校倉書房, 2006.3【3670:1104】)は、ジェンダー史研究の有効性を認めながらも、「男女関係史」に矮小化される危険性に留意すべきであると警鐘を鳴らしました。1980年代に菅野則子との間で見解の相違をみた農村女性労働の質的变化と女性の地位について再整理をし、労働による経済的保障が女性の自立を促進させる要素となりうるのかという命題に挑戦しています。

一方、長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造』(校倉書房, 2006.3【3670:1104】)は、ジェンダー史研究の有効性を認めながらも、「男女関係史」に矮小化される危険性に留意すべきであると警鐘を鳴らしました。1980年代に菅野則子との間で見解の相違をみた農村女性労働の質的变化と女性の地位について再整理をし、労働による経済的保障が女性の自立を促進させる要素となりうるのかという命題に挑戦しています。

(図書情報主担当 高橋菜奈子)

もっと知りたい方のための入門書:

女性史研究入門 / 歴史科学協議会編 三省堂, 1991.4【3670:56】

上野千鶴子「歴史学とフェミニズム」岩波講座日本通史 別巻1 岩波書店, 1995.10【Qf:485:別1】

女性史を学ぶ人のために / 石月静恵, 藪田貫編 世界思想社, 1999.6【3670:623】

ジェンダー史を学ぶ / 長野ひろ子著 吉川弘文館, 2006.11【3670:1096】

日本女性史研究文献目録 / 女性史総合研究会編 東京大学出版会, 1983.2-【3670:100:1~4】